森の水だより

森の水だより
PEPSI
NEX
烏龍茶
NEW クレラップ
第九
合唱幻想曲
初戦突破

# 2008年度2学期木曜1時限
# 「哲学基礎B」
# 「認識するとはどういうことか？」

第11回講義（2008年12月18日）

## §10　知識の因果説

# 1、ゲティア問題の復習

■伝統的な知識の定義：

- SがPを知っているとは、次のときそのときに限る。

  ①Pが、真である。

  ②Sは、Pを信じている。

  ③Sは、Pを信じることにおいて、正当化されている。

# ゲティア反例1

＜状況＞

- 会社の社長が、ジョーンズが最後に選ばれるだろう、とスミスに確信させ、そして偶然に、スミスは、**10**分前にジョーンズのポケットの中の１０個のコインを数えていた。
- スミスは知らなかったのだが、ジョーンズではなく、スミスが仕事を手に入れることになる。また、スミスは知らなかったのだが、スミス自身もポケットに１０個のコインを持っている。

＜このときのスミスの信念＞

- **Q**「ジョーンズは、その仕事を手に入れる男であり、かつ、ジョーンズのポケットに１０個のコインを持っている。」
- **P**「仕事を手にする男は、彼のポケットに１０個のコインをもっている。」

- このとき、スミスの信念P
「仕事を手にする男は、彼のポケットに10個のコインをもっている。」
は、最初の定義によれれば、知識である。

１　Pは真である。
２　スミスはPが真であると信じている。
３　スミスは、Pが真であると信じることにおいて正当化されている。

しかし、これが知識でないことは明らかである。

では、3が成立していないのでしょうか？

# ゲティア反例　２

＜状況＞

- スミスが記憶する範囲内で、ジョーンズは過去においていつも自動車を所有しており、いつもフォードであった。
- スミスにはもう一人の友人ブラウンがいるが、彼がどこにいるのかについて、スミスはまったく知らない。

＜スミスの信念＞

スミスは、正当化された信念f「ジョーンズは、一台のフォードを所有している」をもっている。

さらに、スミスは、ランダムに3つの場所の名前を選び、次の3つの命題を作る。

g　ジョーンズはフォードを一台所有している、あるいはブラウンはボストンにいる。

h　ジョーンズがフォードを一台所有している、あるいはブランはバルセロナにいる。

i　ジョーンズがフォードを一台所有している、あるいはブラウンはブレストリトフスクにいる。

スミスは、fからg、h、iを導出して、それらが真であると信じている。信念g、h、iもまた正当化されている。

- ＜状況の追加＞
- ジョーンズはフォードを所有していないが、しかし、いまは、レンタカーを運転している。
- 偶然の一致によって、スミスは全く知らないのだが、命題（h）で言及された場所が、たまたま実際に、ブラウンのいる場所である。

# このとき、スミスの信念（h）は知識だろうか？

１　（h）は真である。

２　スミスは（h）が真であると信じている。

３　スミスは（h）が真であると信じることにおいて正当化されている。

このとき、定義によりスミスの信念（h）は知識となる。

しかし、これは知識ではないだろう。

# ゲティアの結論

これらの二つの事例は、

＜最初に述べた知識の定義が、ひとがある命題を知っている、ということについての充分条件を述べていない＞

ということを示している。

ゲティア問題とは、知識をどのように定義するか、という問題です。

# ２　ゴールドマンの知識の因果説

- ゲティア問題に対する解決の試みとして、ゴールドマンが提唱した「知識の因果説」(causal theory of knowledge)があ
- (Cf. Alvin Goldman, ‘A Causal Theory of Knowing’, *The Journal of Philosophy,* 64, 1967、.)。

## ■ゴルトマンによる知識の定義

**S**がpを知っているとは、事実pが適切な仕方で、**S**の信念pと因果的に結合しているとき、そのときに限る。

**S knows that p, if and only if  the fact p is causally connected in an “appropriate” way with S‘s believing p.**

# この条件を付け加えることによって、ゲティアの反例が知識の定義から除外される。

- ケース1の場合、スミスが採用され、スミスのポケットに10個のコインが入っていたことが原因となって、スミスの「採用される男のポケットに10個のコインが入っている」という信念が引きこされたのではない、ゆえに、ゴールドマンの知識の定義は満たされない。
- ゆえに、スミスの信念は、知識ではない。（ケース2の場合にも同様である。）

# 知覚による経験的知識

p → Ps(p) → Bs(p)

事実pがSの知覚pの原因となり、
Sの知覚pがSの信念pの原因となる

# 記憶による経験的知識

p → Ps(p) → Ms(p)→ Bs(p)

事実pがSの知覚pの原因となり、
Sの知覚pがSの記憶pの原因となり、
Sの記憶pがSの信念pの原因となる

# 推論による経験的知識

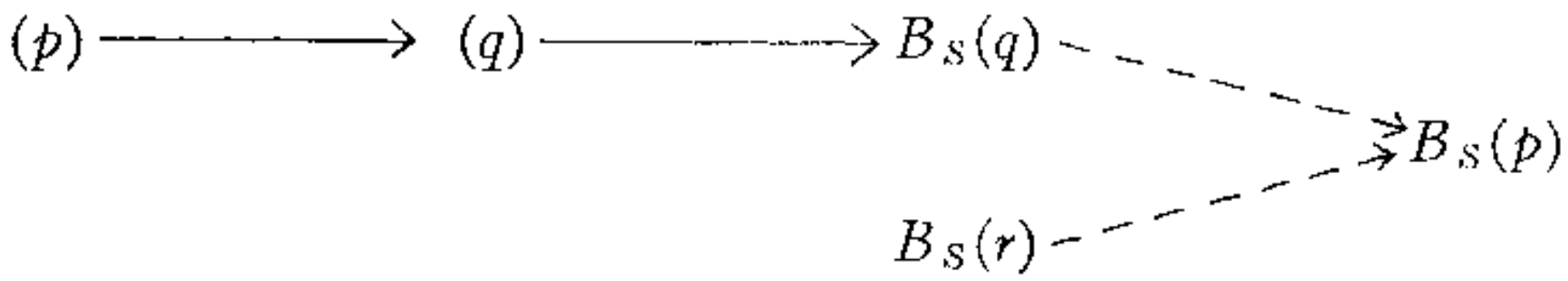


Figure 1

事実pが事実qの原因となり、
事実qがSの信念qの原因となり
Sは、信念qと信念rから信念pを推論する。

# 伝聞・証言（Testimony)による経験的知識

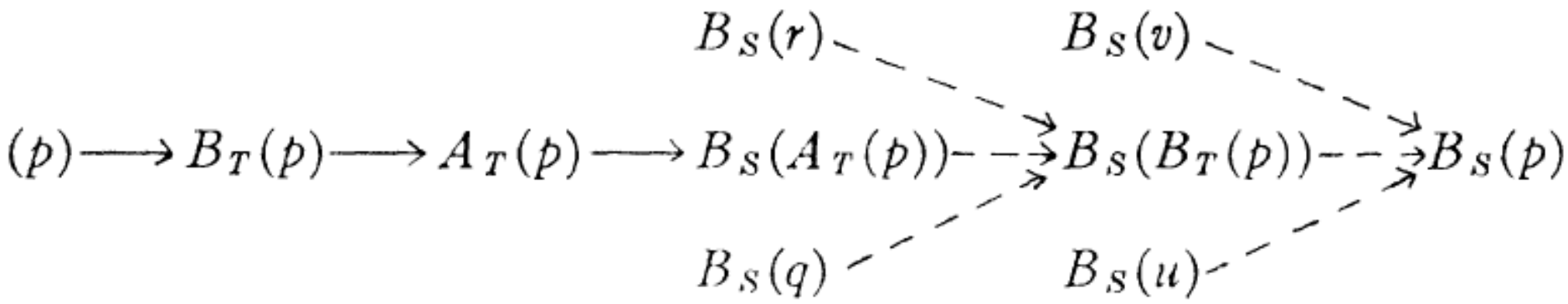


Figure 2

事実pがTの信念pの原因となり、
Tの信念pがTの主張pの原因となり、
Tの信念pがsの信念$A_T$（p）の原因となり、
Sの信念rと信念$A_T$（p）と信念qからSが$B_T$（p）
を推論する、以下同様。

- 事実p：月曜日にTがダウンタウンに行くこと
- 事実q：Tが（日曜日に）月曜日にダウンタウンにいこうと意図すること
- 事実r：TがSに（日曜日に）、彼が月曜日にダウンタウンに行くと言うこと
- 事実uとvは、Tの誠実性などの関連する背景命題

- **Pattern 2 cases of knowledge. Figures 1 and 2 exemplify Pattern I**
- **cases of knowledge.**

# 共通の原因による経験的知識

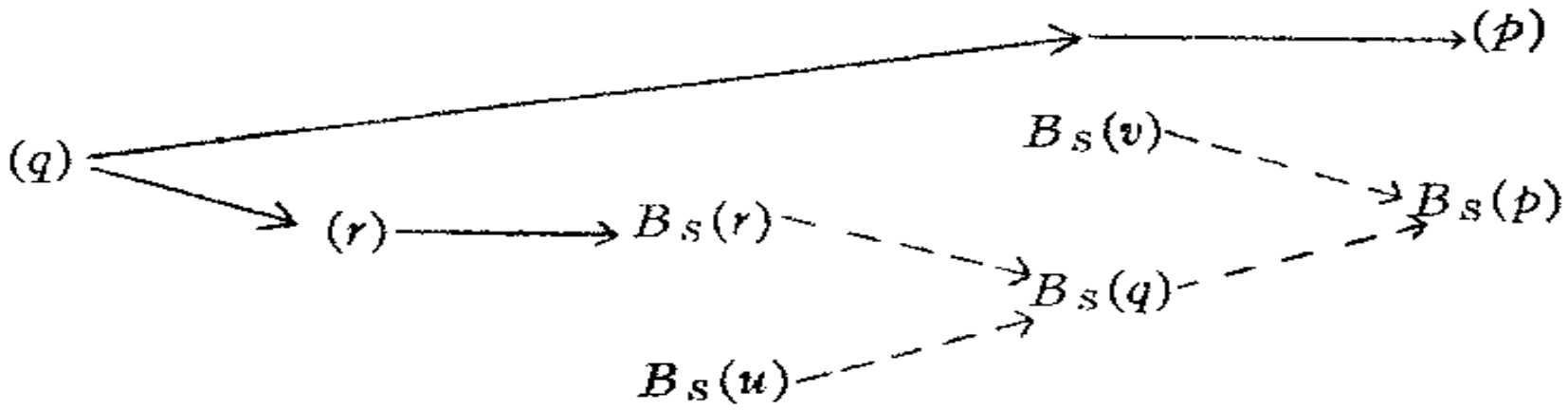

Figure 3

事実qが事実pとrの原因となり、
事実rがSの信念rの原因となり、
Sは信念rから信念qを推論し、
Sは信念qから信念pを推論するとき、
事実qが事実pとSの信念pの共通の原因となっている。

## ■ゴルトマンによる知識の定義

**S**がpを知っているとは、事実pが適切な仕方で、**S**の信念pと因果的に結合しているとき、そのときに限る。

**S knows that p, if and only if  the fact p is causally connected in an “appropriate” way with S‘s believing p.**

「適切に」知識を生産する因果過程には、次のものがある。

- （1）知覚
- （2）記憶
- （3）パターン1or2の例となっている因果連鎖、これは推論によって正しく再構成されており、それぞれは保証されている。（それらが真である場合のみ、背景命題は、推論を保証する助けになる）
- **(4)**（1）（2）と（3） の結合

- 注：パターン1とはFigure1＆2、パターン2とはFigure3を指す

# ３　知識の因果説の欠点

- 戸田山氏は、『知識の哲学』で「知識の因果説」の欠点を挙げている。

# ■知識の因果説の欠点1：論理学や数学的知識には使えない。

- 「数学的知識には全く使えない。「１＋１＝２」という知識の原因は、１＋１＝2という事態だ、といわれても、1という数と2という数を含む事態から私の信念にいたる因果連鎖というものは考えられない。」(戸田山、前掲書、p.63)

# ただし

- ゲティア問題は、論理学や数学については、生じない。
- 論理学や数学では、知識の古典的な定義で十分である。
- なぜか？
- 論理学や数学では、信念は経験によらずに得られる。そこでの正当化は経験に基づかない。それゆえに、正当化された信念は、真である。
- 計算間違いのようなケースを除くと正当化された信念は真である。
- ただし、論理学や数学についてもミュンヒハウゼンのトリレンマは克服できないので、厳密に考えたときには、正当化は不可能である。上の議論は、通常の意味での正当化で十分だと考えたときの話である。

# ■知識の因果説の欠点2：近い未来についての知識

- 「たとえば、10階建てのビルの屋上から男が飛び降りるのを見た私は、あの人は助からないなと思う。案の定、彼は5分後にその場でなくなった。このとき、私はそのおとこが死ぬことが解かっていたと言ってよいだろう。でも、その知識は彼が死んだという事態によって引き起こされたものではない。」(前掲書、p.63)

## （入江の付加）
## ■知識の因果説の欠点３：
## 全称命題

- たとえば「すべてのカラスは黒い」は「明日生まれるカラスは黒い」を含意するが、後者は、欠点2に示されたように、知識となりえない。ゆえに、「すべてのカラスは黒い」もまた知識となりえない。

# ■知識の因果説の欠点４：逸脱因果(deviant causation)

- 事例１：
- 「俺の部屋に相棒のヴィンセントがヤクを運んでくることになっている。警察も俺を狙っているので、おれがヴィンセントと打ち合わせをして、奴が扉をノックするときに「コンコココンコン」とたたくようにと言った。俺は奴を待ちに待った。ようやく扉をノックする音がした。俺は安心のあまり、ノックの取り決めのことは忘れ、外にヴィンセントがいると信じて扉を開けてしまった。ラッキーなことに扉の外に立っていたのはヴィンセントだった。ヤバかったぜ。」(前掲書、p.64)

- 事例2：
- 「ヘンリーがある地域をドライブしている。彼が対象を弁別する能力には問題がない。ところが彼は知らないが、その地域には張り子というか、納屋に似せたつくりものがいっぱいあって、それらは道路からは本物の納屋に見える。ヘンリーがこの地域にさしかかって拵えものを見たら納屋にみえることだろう。彼は一軒の納屋を見たが、じつはそれは本物の納屋であった。このとき、ヘンリーはそれが納屋であることを見て知ったといえるか」（Alvin Goldman, ‘Discrimination and Perceptual Knowledge’, *The Journal of Philosophy,* 1976, p.773）

（土屋純一「知覚による知識」『現代哲学のフロンティア』勁草書房、p.23からの孫引き）

# 第一回レポートの課題

１　ゲティア反例の例を挙げなさい。

２　知識の因果説への批判となる
　　逸脱因果の例を挙げなさい。